

## 土方巽・暗黒舞踏の受容と変容（4）

—研究現状・ニューヨーク大学と早稲田大学「学位論文」再審査請求、  
「NHK本」販売中止請求および東洋的身体論からの試み①—

三 上 賀 代  
MIKAMI Kayo

### はじめに

「舞踏はもう古いのだろうか」1986年の死を前にした、暗黒舞踏創始者・土方巽（1928－1986）の言葉は杞憂に終わった。アングラ舞踏の誕生から50年、舞踏の海外進出から30年を経た今日、クラシックが冠されるようになったButohは、東欧、北欧を含む欧米のみならず、アフリカ、中近東、中南米、ロシア、東南アジアと全世界に根を張り、世界各地でのButohフェスティバルの開催、外国人Butohダンサーや舞踏研究者の輩出などの盛況ぶりは、国内からは想像もできないほどである<sup>1</sup>。

国内における舞踏は依然マイナーの感を否めない。が、幼少よりの海外ダンス留学が珍しくなくなり、様々なダンスジャンルを取り込むコンテンポラリーダンス活況の中で、舞踏もまたひとつのダンススタイルとして受容されている<sup>2</sup>。

こうした国内外の舞踏受容は、現代の閉塞感打破を求めて一般化する身体への注視とパフォーマンスアーツの広がりとの延長線上にある。すなわち、1970年代末のアメリカ西海岸の一部の若者のように、ヨガマットを下げマクロビオティックレストランで食事する多くのニュー Yorkerたちに見られる禅や気功といった東洋的身体技法への一般的関心、およびダンスにおける新しい動きを生み出す方法論的興味が、21世紀の舞踏需要を支えている。

本年6月の、土方とともに舞踏創始の両翼であった大野一雄103歳の死は、「舞踏とは何か」の問いにひとつの形を与えることになる。大野の死の直後「大野は舞踏ダンサーではなく、モダンダンサーであった」という、土方舞踏を発掘し50年を舞踏に伴走した舞踊批評家・合田成男の発言<sup>3</sup>は、土方暗黒舞踏が示し、探求した肉体と表現の意味の再考を迫るものである。

本稿は、2009年京都精華大学在外研究成果報告の一環として、2006年以降の舞踏の研究現状と世界の舞踏パフォーマンス状況の一端を示した上で、東洋的身体論を手がかりに21世紀の舞踏の可能性を探る試みの端緒とする。

## I 舞踏研究の現状

### ——知的所有権に関する研究者、大学、出版社、学会の道義的責任

2006年以降の世界の舞踏研究状況として、所見のところでは土方巽、大野一雄、山海塾、エイコ&コマ、舞踏一般に関する博士論文や修士論文が書かれ、あるいは着手されている<sup>4</sup>。

研究上の問題として、インターネット上に所見の情報が氾濫し、海外での学位取得や実務者の研究職への移行が進行する高度情報社会および国際社会において、知的所有権に関する研究者ならびに大学、出版社、学会の道義的責任が問われる事態が発生している。

#### 1. 栗原「ニューヨーク大学学位論文」再審査請求

##### ——三上論がスキップされて進む世界の土方研究

現在、世界初の土方研究である三上賀代修士論文「土方巽研究—舞踏技法の考察」（お茶の水女子大学 1991）が一般書として出版された『器としての身体—土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』（ANZ堂 1993）と「セイムアイデア」を指摘される栗原奈々子 ‘The Words of Tatsumi Hijikata’ “The Drama Review” Spring 2001 New York に添付された世界初の栗原訳土方英訳文を一次資料として、世界の土方研究が進められている<sup>5</sup>。

類似論考である栗原論文に先行論としての三上論の参照表記はなく、三上論がスキップされて進む舞踏研究の現状について、私は、2009年8月ポーランドのグダニスクで開催されたバルチック国際舞踊学会での招待講演「舞踏の50年」の中で発表し、東欧圏の舞踊研究者への問題提起を行った。

2009年12月、私は上記栗原論文 ‘The Words of Tatsumi Hijikata’ の元となるニューヨーク大学栗原学位論文 ‘The Most Remote Thing in the Universe: Critical Analysis of Hijikata Tatsumi’s Butoh Dance’ (1996.9) の「再審査請求」を、参照表記のない類似箇所を英訳添付して、ニューヨーク大学パフォーマンス学部長に提出し、同文書を “The Drama Review” 誌編集責任者のリチャード・シェクナー氏と、三上論と栗原論のセイムアイデアを指摘した舞踊研究者にも送付した。

ニューヨーク大学パフォーマンス学部長からは「大変シリアスな問題、早急に対処する」という返信後、2010年3月「審議の結果、剽窃の立証は難しい」という回答を得た。今後、私はニューヨーク大学学長と同大パフォーマンス学部長に対し、国内外の舞踊研究者の賛同書付きの「栗原学位論文再審査請求」さもなくば「再審査審議内容開示請求」を続ける予定である。

なお、1996年夏アメリカのCORD (the Congress of Research in Dance) 国際舞踊学会での栗原氏の土方研究発表時、日本人舞踊研究者による「日本で研究発表しないのか」という問い

に「帰国予定はないので日本の学会では発表しない」と答えた栗原奈々子氏は、2003年の日本の舞踊学会誌上で私が求めた公開質問への反論もなく、帰国後数年たつ現在も舞踏研究者を名乗らず、国内で土方研究発表も行っていない。

## 2. 稲田奈緒美「NHK本」販売中止請求と同「早稲田大学学位論文」再審査請求予定

三上『器としての身体—土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』に続く研究者による土方本として、土方関係者へのインタビューに基づく稲田奈緒美『土方巽 絶後の身体』（日本放送出版協会 2008）が出版された。稲田『土方巽 絶後の身体』の543-544頁には「輪郭、内と外、部分の分節までが曖昧な、時空を超えて拡張する身体へ・・・『朦朧体』『衰弱体』『灰柱』などという詩的な言語……実体として存在する身体を用いながら、なおかつ生身の身体を超える身体を舞踊として呈示すること、そのための思想と方法論、つまり身体に対する意識・感覚、さらに、具体的にするための技術を分析することが、舞踏批評・舞踊批評でありえるはずだ。（本文改行一行空き）土方独自の舞踏論・身体論については今後の研究を待つ」という事実ではない記述がある。

すなわち、私は、土方の詩的言語の「舞踏譜」に振付けられて、「灰柱」に象徴される「皮膚境界の溶解と希薄化」といった実在する「肉体の消滅」を図ることによる空間創造を目指す土方舞踏の「神経回路」再編という、まさに稲田氏の言う通り「思想と方法論、つまり身体に対する意識・感覚、さらに、具体化するための技術を分析」し、「土方独自の舞踏論・身体論」の考察、解明を行なった。これが三上『器としての身体』と三上学位論文「土方巽研究—暗黒舞踏技法試論」（お茶の水女子大学 1997.3）である。

稲田『土方巽 絶後の身体』において、上記のように「事実でない記述」と、個々の類似論考の参照不明記および参考文献にさえ三上論が挙げられていない「先行研究不十分」「剽窃の疑い」によって、私は、論文のオリジナリティを侵害され、名誉を毀損され、国内外での土方研究者としての仕事を制限されるなどの不利益を蒙っている。

2010年3月「土方巽研究会シンポジウム」（於・京都造形芸術大学）において、稲田『土方巽 絶後の身体』の「事実でない記述、参照不明記、先行研究不十分」に関する私の質問に対し、稲田氏は「（参照不明記を）言われると思ったから次（学位論文）からは書いた」と三上論抹殺の確信犯的回答をした<sup>6</sup>。この回答を受け、私は、2010年6月、日本放送出版協会代表取締役社長、同販売部書籍課課長、同稲田本担当編集者宛に、上記事由による稲田『土方巽 絶後の身体』の「書店からの回収と販売中止請求」を求めた。

同時に、知的所有権を侵害する著書に基づく後続研究である稲田「早稲田大学学位論文受理意義申立」書を、早稲田大学大学院研究科長と関係各位宛に送付した。

2010年7月、早稲田大学大学院文学研究科演劇映像学コース主任と学位論文審査委員会主任審査委員から、稲田学位論文は「文学学術院教授会で受理のうえ、審査委員会での厳正な審査および公開審査会を経て、4月21日の文学学術院教授会にて博士（文学）早稲田大学の学位授与が認められた」という経緯のみ報告する返答を得た。

しかし、一人の研究者を抹殺する文言を放置したまま、説明責任を果たさない日本放送出版協会からは、いまだ何ら回答がない。

私は、「稲田早稲田大学学位論文」の2011年10月公開を待ち、先行論参照表記を確認の上、よしんば稲田氏の言うように三上論が「次（学位論文）からは参照明記」されていたとしても、「先行研究不十分、剽窃の疑い、事実でない記述」によって先行論を侵害する著書に基づく研究、すなわち社会的影響力の大きい著書と学位論文で二枚舌の記述を行なうアンフェアな研究者に、学位が授与されることが許されるのかを問う「稲田早稲田大学学位論文再審査請求」を提出する予定である。

### 3. 関係理事による舞踊学会「一般研究発表申込理由なき却下」——問われる学会の機能と体質

2010年8月末日、私は、第62回舞踊学会大会に「土方巽・暗黒舞踏の受容と変容（5）知的所有権に関する研究者、大学、出版社、学会の道義的責任－稲田奈緒美『NHK本』販売中止請求と同『早稲田大学学位論文』再審査請求を事例に」の一般研究発表申込を行なった。これは、2002年舞踊学会で発表し、2003年『舞踊学』第26号掲載の三上「土方巽・暗黒舞踏の受容と変容（1）国際化社会における研究現状と論文のオリジナリティの問題・栗原論文を事例に」に続く、知的所有権に関する第二回目の問題提起として、稲田本、稲田論文を事例に、日本の舞踊学会に再度、三上論の知的所有権の保障を求めたためのものであった。最終的には、専門研究者の判断によってしか保証され得ない研究の「知的所有権」の保護は、法的措置を求めるとは多額の裁判費用を必要とするため、専門研究者の集まる学会に求めるしかない。こうした事例発表による問題提起は、研究と編集が混同され、知的所有権保護の責任の所在が曖昧になるアンフェアが散見する研究現状において、舞踊学のみならず、各機関の機能健全化の一助としたいという学会一般研究発表意図に基づくものであった。

しかし、2009年9月16日、舞踊学会大会実行委員会から何の理由も示されず、私宛に「理事会決定により三上一般研究発表申込は受諾できず」というメールでの回答があった。この「理由説明なき三上学会一般研究発表申込却下」は、稲田「早稲田大学学位論文」副査3人が舞踊学会理事であり、さらに舞踊学会会長と副会長でもある理事会での決定として、李下に冠を正す行為とみなされる可能性がある。関係理事たちによるこの「理由説明なき学会一般発表申込却下」は、文部科学省の教育行政や公的助成金申込審査などに関わる公人である理事会メンバ

一の恣意的体質と危機管理能力を問われるものである。

2010年11月25日、私は、舞踊学会理事会に抗議文を送付し、却下理由説明を求めている。

## II 舞踏パフォーマンスの現状

### ——アンゲラ舞踏の伝承とワークショップジプシー

#### 1. 国内外ダンサーの舞踏受容——舞踏の身体と動き

2009年7月ベネチア・ビエンナーレで上演された若手コンテンポラリーダンサーによる5作品のうち1作品は明らかに舞踏作品、もうひとつには舞踏の影響が濃厚であった。彼らの経歴には仏在住日本人舞踏家のワークショップ受講歴が記され、また彼らが師事した欧米の著名ダンサーへの舞踏の影響がうかがわれた。

同8月フランスのアビニョン・フェスティバルのメイン作品である石切り場でのフラメンコ創作舞踊は登場のシーンから舞踏的集中感を持つ身体性が見られた。同作品中の立てた棺桶の中でのダンスシーンなども舞踏の手法を髣髴させた。公演後見たパンフレットには舞踏振付者として在欧の日本人舞踏家の名前があった。

同11月ニューヨークの小スタジオ「CAVE」で開催されていた舞踏フェスティバルに参加した10人の外国人舞踏ダンサーには、彼らが何を舞踏として受容しているかが明らかであった。裸、白塗り、身体への集中、無音による観客への集中の要請、ゆっくりした歩行と動き、肉体の解体的分裂による各部位の動き、暴力的落下や肉体投地、痙攣や肉体の一部を固めた奇矯な動き、寝技から中腰を中心にした低い姿勢の動き、背面ダンスなど肉体部位の強調、肉体各部の足場の変化による部位の変容した動き、足首や膝や腕などの関節を固めた硬い動きなどが舞踏の特徴として見られた。こうした舞踏の集中感のある身体性と特徴的動き、それらによる時空間把握が示される作品の多くは、どの舞踏家の影響を受けているか特定でき、また日本人舞踏家とそっくりな作品もあった。

以上のような舞踏の影響は、バレエから武道まであらゆる技法を取り込んだのコンテンポラリーダンスから、バレエ、フラメンコ、世界的サーカスや演劇まで多岐に及ぶ。そして、パリやニューヨーク、北欧の一般人でも、舞踏と言えば「裸で、ゆっくり動くダンス」と、日本人より舞踏の認知度は高い。

2005年以来私が毎年主催する、国内外の舞踏家、民俗舞踊家、狂言師、野口整体指導者、武医道師範などの講師陣を招いての10日間の夏合宿「日本の源流、身体の源流から舞踏へ」にも80代を含む舞踏家志願者だけでなく、オーストラリアの物理学者、ポルトガルのクラウン、メキシコの俳優など様々なジャンルの外国人が参加、またパリで活躍する日本人コンテンポラリ



ーダンサーや英国に演劇留学している日本人学生など、海外で舞踏の存在を知って逆留学参加する日本人も増えている。2009年8月グダニスクでの私の舞踏ワークショップに参加したポーランド女性の「インドで、インド在住の日本人舞踏家に舞踏を習った」という発言にも舞踏の世界的広がりが示される。

## 2. 舞踏マーケットの確立——職業としての舞踏家とワークショップジブシー

今世紀急速に世界は狭くなり、草の根運動的文化交流が一般化している。2009年夏、私が出会った琴を持参の子連れでルーマニア等へ演奏旅行する九州の琴師範や、地唄舞と日本舞踊師範たちがハンガリーとの友好公演を続けて10年になるなど、日本文化の自前の出前公演の隆盛も、海外の舞踏状況を変える要因となっている。すなわち、パリの日本文化会館やニューヨークのジャパンソサエティといった公的機関主催の異文化紹介がメインであった舞踏の海外進出が、パリの天理センターでは10年来、またニューヨーク在住日本人美術家が運営するスタジオCAVEなどでも、50人入れれば満席の日本の小劇場と同じスタイルで舞踏ワークショップと舞踏公演が行われている。

1980年代の大野一雄、山海塾以降の海外での舞踏需要は、30年来海外在住の室伏鴻、カルロッタ池田、ミゼール花岡、玉野黄市、エイコ&コマらに続くSU-EN、岩名雅記らの舞踏ワークショップや公演、20年来日本から海外のワークショップに出向く中嶋夏、和栗由紀夫らによって開拓された「舞踏マーケット」に支えられている<sup>7</sup>。

こうした舞踏需要の拡大は、職業としての舞踏家の成立と師を持たない舞踏家の海外デビュー、国内外の舞踏ワークショップを渡り歩くワークショップジブシー、京都や北海道や九州など地方在住の舞踏家が東京を越えて直接パリ公演を行うなどの現象を生んでいる。

職業として成立し得ない故に、自己申告制の観がある詩人と舞踏家における舞踏の職業化は、上記のような舞踏の表現スタイルの画一化と舞踏メソッド成立の促進を促す。パリ天理センターで10年来舞踏フェスティバルとワークショップに携わる日本人スタッフの「虫の歩行などの舞踏譜のワークショップが行われている」という発言は、土方舞踏譜「虫の歩行」の初出と解説による土方舞踏技法解明を試みた三上『器としての身体—土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』が出処不明の百科事典的内容として輸出されていることを示す<sup>8</sup>。

国内の舞踏ワークショップを受講し海外に輸出する舞踏家にみる舞踏の情報化といった現象は、伝統芸能のかつての徒弟制度に比肩する弟子の「自己放棄」と師の土方が弟子の芦川に「のりうつる」ような師弟関係によって創り、伝えられた土方舞踏の本質を揺さぶる危険性を持つ。

すなわち、立つことから始まる世界の舞踊に対し、「立とうにも立てないところから始まる舞踏」「迷い迷い来たアスベスト館（土方稽古場）への道、稽古場の裏で汗臭いシャツの匂い

を嗅ぐ、そこにあなたの舞踏があるのではないですか」といった土方の言葉は、厳しい師のまなざしの前で、常に、自分は何故踊るのか、表現の何を習うのかが問われ続けることを示している。既成の舞踏技術を否定して始まった「アンガラ舞踏の伝承」という矛盾は、「いのちとかたち」の追いかけてこととしての芸術の本質的問題を示すものである。

### Ⅲ 21世紀の舞踏へ——湯浅泰雄「東洋的身体論」を手掛かりに

#### 1. あの世の土方からの電話——憑依の事例

「生きているのに何故できない」1999年12月末、あの世の土方から電話がかかった。私の父の死の直後、土方は勿論、私の踊りさえ見たことのない引越していった知人からの数年ぶりの電話だった。彼女は、盆踊りさえ踊ったことのない普通の主婦で、私の娘の保育園時代の友人の母親である。

「体中の穴から蛆虫を出してヘラヘラ笑う四角い顔の汚い親父と、紅顔の美少年だった親父が、キラキラ光る川原で遊んでいる」という彼女の描写は、土方と私の父をこれ以上の確に表現できないものであった。「土間の裸電球ひとつでいい。シャンデリアはいらない」「四つ、五つ残してきた卵がみんな違う方を向いている」「(土方の稽古場閉鎖を知らないで) 子供をなくす悲しみ」など彼女を通してのあの世の土方からの電話は、以後四年間半の間、研究発表や舞踏公演などで私が土方舞踏に関わり悩んでいる時、半年に一度位の割合で、10回ほどかかり、その時々私が必要とするメッセージが伝えられた。「潔癖親父がフラダンスのレイを首にかけ、踊っているヘラヘラ親父の指示で、サクラになって拍手してる」あるいは、「踊りは一瞬」と言いながら「中華料理の回転テーブルみたいな机の上で踊る汚い親父が、テーブルの回転で、一瞬で天女になった。美しいなあ。あんたたちこれをやりたいんだねえ」といった状況描写は、途中「え、なに」と彼女が土方に問い直し、私に伝え直すこともあった。

「紙を落とすと揺れて落ちる。その動きに教わる。自然が教えてくれる。足の裏が大事、川の中の石の上の足から、川から上がってきて小石の上、砂の上、草の上、土の上、足の裏の状態では変わる。森の中に入って行って樹の枝が伸びて行って・・・」などという言葉は土方舞踏メソッドの核心を示すものであった。

あの世の土方からの電話は、彼女が土方舞踏を踊ることで終わった。数年ぶりに私の家を訪れた彼女と一緒に酒を飲んでいる時、彼女は突然、土方の「獣ぶり」で飛び上がり、数分間踊った。「ハアハア」と息を荒らげ踊り終え机につつぶし、その後、しばらく談笑の後、また突然踊り出し、彼女は二度踊った。彼女の土方憑依の踊りを見ていた私と夫と舞踏関係の友人の三人は「こんなことが本当にあるんだ」と呆然とした。踊った直後、彼女は、土方そのものの

語り口で夫に「三上、お前はなんで舞踏なんだ」と絡みはじめた。その挑発の仕方と緊張のはずし方は、土方の語調そのものであった。

寝入りばなしと酒を飲みリラックスした時にビジョンが見え、土方の声が聞こえるという彼女からの最後の電話「川の向こうから親父（土方）が呼んでる」の直後、私たちは川の向こうの大磯に、突然まさに運ばれるように引越し、私は期せずして大磯「黒金閣」という野外ステージを持つことになる。野外ステージに「土間の裸電球」ともした舞踏公演や「日本の源流、身体の源流から舞踏へ」と題する夏合宿などを主催し、実践的舞踏研究と舞踏の可能性の発信を続けることになる。大磯への引越しを機に、あの世土方からの電話は終わる。

## 2. オカルティズムと近代のパラダイムシフト——心身一如の「気」から

オカルトと呼ぶしかない以上の事実をいかに考えるか。思想家・湯浅泰雄はオカルティズムを近代の始まりと終わりの自然観、人間観のパラダイムシフトを推進する心理的、思想的原動力とみなす。湯浅は、ルネサンス期の錬金術師の幻視体験と物質の化学的変化を重ねた、隠れた秩序としての「唯一の世界」という宇宙観を背景に、内的な心の世界への関心がオカルティズムに、外なる世界の関心が近代科学の始まりとなったと言い、十九世紀末から二十世紀初めの知識人を中心にしたオカルティズム隆盛第二期に、心霊研究や超常現象への関心から深層心理学、催眠研究、超心理学という新しい学問領域や考え方が生まれたことを概観する。そして、この時期のシュルレアリズム運動における「芸術家の直感」にユングらの影響を指摘し、第二期とひと続きになる20世紀末の第三期、先進国特に日本を中心に一般化したオカルティズムの流行に伴う、科学革命以来のパラダイム変換は21世紀にはっきりするのではないかという湯浅は、オカルトでは包みきれない、東洋の身心一如の身体観における未知なるエネルギーである「気」に、物としての身体と心と結び、身体内外を結ぶ可能性、つまりデカルト以来の経験科学のパラダイム変換の可能性を見る<sup>9</sup>。

湯浅の指摘する、ユングの我—汝の対立を超えた潜在的経験の次元に至る入り口として、中国古代の易の世界と関連させて因果性とは異質な「共時性の原理」や元型的次元の集合的無意識の仮説としての「宇宙的無意識」もまた、舞踏の身体を考える指標となる<sup>10</sup>。

## 3. 「肉体の底に降りていく」という方法と「からだの剝離」

### ——脱底と創造的直感を見通す舞踏家の眼

土方死の一ヶ月前、最後のワークショップの最終日「瀕死の森へ、瀕死の舞へ、光へ、死へ」をテーマに、最後の言葉として残された「極希薄化した内触角は無限に遠く、極微細化した外触覚は無限に高く、霧深く深くなったとき、気がつくと彼は峨々たる山を引いているのだ・・・」



の内外触覚を内外の気の流れ、さらに土方舞踏譜に規定された繊細な意識の分裂による「神経回路」の網の目の増殖という土方メソッドにおける「神経」もまた気の流れる「経絡」と捉える可能性もある。

土方一番弟子の芦川羊子は身体を眼差す「舞踏家の眼」の増殖、つまり身体意識の変容をベースに舞踏の身体を獲得した<sup>11</sup>。憑依と人形つまり神化とモノ化という両極の超越の間に現象する舞踊において、芦川の「寄り目」は「半分憑依」すなわち憑依を見つめる人形の眼を示すと考えることができる。芦川はそうした自らの身体への距離、つまり身体意識の網の目の緻密化によって自らの身体を「覚醒体」とした。土方死後の芦川のワークショップにおける「壁の中に入っていく自分の内臓や骨、壁の中に入った自分の目玉と残された目玉の距離を保ったまま、壁から剥がされる、振り返った時、世界はすっかり変わっていた」などに示される「からだの剥離」による世界の変容は、日常を生きる身体から、土方のいう「私という一点におけるドゥーブル（二重の影）」としての舞踏の身体への移行を指すものであろう。

この「剥離」されたからだを、湯浅のいう「第4の回路としての無意識の准身体（長沢善男）<sup>12</sup>」つまり経絡の流れとしての身体と捉えると、芦川の「からだの剥離ができてくると自分の中でだまされることか展開してくる」という言葉は、湯浅の言う瞑想や修行によって獲得される「意識のひらけ」によって獲得される「くらい意識」における「創造的直感」による自在な、「からだが決める」世界<sup>13</sup>を示すという捉え方もできよう。

そして、こうした意識状態は、源了円の言う、禅の見性体験と同質の、心、技、体の一致を可能にする「無心」さえ忘れた「脱底」すなわち底への超越<sup>14</sup>への道程を指すものかもしれない。

しかし、土方最晩年の弟子、正朔の聞いた土方の「瞑想するな、陶酔するな、具体的であれ、過剰であれ」「肉体の底に降りていき、そこに踏みとどまる勇気を持って」という言葉は、土方の「意思即物質」としての心身一如の世界が、あくまでも引き裂かれる心身のズレをまなざす舞踏家の眼によって、「意思」されるものであることがわかる。

舞踏は、自らの「迷いの生をポジション」として、土方夫人・元藤燐子の言う「本当の生活を探す旅」のひとつの方法であるのかもしれない。

まとめ——情報の蚊に噛まれて薄くなっちはいけない。

「情報の蚊にかまれて薄くなっちはいけない」四半世紀前の土方の言葉は今日を予見する。世界中に張り巡らされた情報ネットワークの震えに血を吸われ、私は何者であるかがますますわからなくなっている現在、私が私であるための最後の砦である私の肉体へのまなざしから始まった舞踏もまた、ひとつの情報になりつつある。

「踊りは誰でも踊れる。しかし、なかなか大変なものだ」という土方の言葉は、自らの肉体に向き合う困難さを示す。自らの肉体において御しがたい意識と格闘した土方の志をどのように継承していくかという問題が今、大きく浮上する。

パソコンゲームに興じる子供たちの身体が変わり、神楽などの伝統芸能の継承も危ぶまれている。「乱れて盛んになるよりは、むしろ固く守って滅びよ<sup>15</sup>」という狂言師の言葉に示されるほどに舞踏に伝統はない。が、土方に直接関わったものとして、今後の舞踏の展開を深く考えるべき時期に来ていると考える。

- 1 メキシコの舞踏祭やインドネシアで開催されるようになった舞踏ワークショップや公演、セネガルで現地ダンサーに作品創作を行なう舞踏家の弟子の日本人、イスラエルや南アフリカやエクアドルからの舞踏留学など、2006年以降も世界の舞踏需要は拡大を続ける。
- 2 東京の小スペースで夏場2ヶ月間開催の「ダンスが見たい」は12年間、京都のプロデューサー集団が毎年、全国展開している「踊りに行くぜ」は10年間続き、舞踏を含む多くのコンテンポラリーダンサーに作品上演の機会を提供している。
- 3 2010年8月、とりふね舞踏舎主催「第五回・大磯〈黒金閣〉夏合宿」における若手舞踏批評家たちとの対談中の発言。
- 4 三上賀代「土方巽・暗黒舞踏の受容と変容(3) 身体・言語・イメージ―野口体操と三木形態学を手掛かりに」『京都精華大学紀要』第31号 2006.9 pp.133-154以降、私が閲覧し得た舞踏関係本、修士論文、博士論文。多くは慶応義塾大学アートセンター土方アーカイブ所蔵。

なお、以下注5に示す三上「土方巽 暗黒舞踏の受容と変容(1) 国際化社会における研究現状と論文のオリジナリティの問題―栗原論文を事例に」『舞踊学』第26号 舞踊学会 2003 p.65で、「海外の方が舞踏研究は進んでいる」と公言する舞踊研究者および孫引きを理解せず、海外文献のみを参照表記する大学院生の問題を、「研究史を持たない舞踊学全般の問題」という指摘の後、國吉和子「舞踏研究の現在―土方巽と暗黒舞踏の研究を中心に」『演劇研究センター紀要Ⅱ早稲田大学21世紀COEプログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉』2004.1 pp.213-224、同「海外舞踏文献紹介(舞踏研究編)」『舞踊学』第31号 舞踊学会 2008 pp.133-134に、国内外の舞踏研究の特徴と傾向が考察された。しかし、國吉「舞踏研究の現在」添付の「研究論文・関連論考一覧」には、1988年12月第28回舞踊学会大会口頭発表の三上賀代「土方巽舞踏論―消える構造・その1〈自己放棄〉」『舞踊学』第13号別冊舞踊学会 1990.2 p.18の記載はない。この三上「消える構造」口頭発表直後の類似論題の國吉和子「消滅する構造―舞踏家の老後のために」『季刊思潮』思潮社 1989.4に対する三上の國吉氏への私的抗議が、土方巽研究における知的所権問題の端緒となる。國吉「消滅する構造」の先行性を明示する國吉「舞踏研究史」の中で、三上論はスキップされ、三上のパイオニア性は決定的に抹消された。

○本

- ・ 稲田奈緒美『土方巽 絶後の身体』日本放送出版協会 2008
- ・ 森下隆『土方巽 舞踏譜の舞踏—記号の創造、方法の発見』慶応義塾大学アートセンター 2010
- ・ SU-EN,MAJA SANDBERG,GILLES KENNY, “Butoh-Body and the world” ABCO Ekblad &Co Tryckeri,Vastervik 2003
- ・ Stephen Barber, “Hijikata:Revolt of The Body” Creation Books 2006
- ・ Sondra Fraleigh and Tamah Nakamura, “Hijikata Tatsumi and Ohno Kazuo” Routledge 2006

○博士論文

- ・ 塩田靖子「山海塾研究—作品《卵を立てることから—卵熟》を中心に」お茶の水女子大学 2007.3
- ・ Tamah L. Nakamura, “Beyond Performance in Japanease Butoh Dance:Embodying Re-Creation of Self and Social Identities” Field Graduate University 2007
- ・ SylvianePages, “La reception des buto(s) en France : Representations, malentendus et desires” Universite paris 8, 2009
- ・ 稲田奈緒美「土方巽・暗黒舞踏研究—身体という制度への叛乱」早稲田大学 2010.4

○修士論文

- ・ Tara Ishizuka Hassel, “Butoh : on the Body of Crisis? Critical Analysis of the Japanese Avant-garde Project in Postmodern Perspective” University of Oslo 2005
- ・ 宮川麻理子「大野一雄における女装の意義とその変遷—『ラ・アルヘンチーナ頌』に至る軌跡」東京大学総合文化研究科 2009
- ・ 嶋田勇介「土方巽『病める舞姫』研究」多摩美術大学 2009
- ・ Jennifer Pterce, “Choreography of the Body-Object : A Multi—Media Choreography System Inspired by Butoh-fu” 早稲田大学 2010

○論文

- ・ Bruce Baird, ‘Structureless in Structure:The Choreographic Tectonics of Hijikata Tatsumi’s Buto’ David Jortner, Keiko Mcdnald, Kevin J.Wetmore Jr, “Modern Japanese Theatre And Performance” Roman & Littlefield Publishers, London etc. 2007
- ・ 國吉和子 注4 既出の他に「暗黒舞踏登場前夜—大野一雄作品『老人と海』から見た1959年」『舞踊学』第31号 舞踊学会 2008 pp.22-33
- ・ 稲田奈緒美「土方巽・暗黒舞踏における非統合の身体—1970年代の身体像とメソッド」『舞踊学』第31号 舞踊学会 2008 p.113
- ・ 佐向治子「エイコ8コマの映像作品に見る裸体の表像」『舞踊学』第32号 舞踊学会 2009 p.24
- ・ 田中弘二「舞踏符の現場」『シアターアーツ第二次』40号 ALCT日本センター 2009 pp.98-109

## その他

- ・ Chris Magee 'Dance in Darkness:Butoh on Film' Marty Gross Film Productions, Toronto, 2010
  - ・ Aleksandra Capiga 'Bunt Ciala:Butoh Hijikaty' Manggha.Museum of Japanese Art & Technology Krakow, 日本美術技術博物館マンガ
- 5 三上賀代「土方巽の受容と変容 (1) 国際化社会における:研究現状と論文のオリジナリティの問題—栗原論文を事例に」『舞踊学』第26号 舞踊学会 2003 p.65で、栗原論文における三上論文との類似を論証し、栗原氏の反論後、舞踊学会に三上論のオリジナリティの保障を求めた。しかし、栗原英訳の土方言語に惹かれ土方研究を始めたと言うポーランドの研究者同様に、栗原論においてスキップされた三上論文を知らない海外での研究事例が散見する。
  - 6 注5で、私は、論文のオリジナルも理解せず、海外研究者から三上論文との「セIMUMアイデア」を指摘される栗原論文のみを孫引して参照表記する稲田論文の先行研究不十分を、稲田氏の名前を伏せて、既に指摘している。
  - 7 ドイツ在住の故・古川あんず、古関すまこ、遠藤公義、シチリア在住の大西小夜子、海外を拠点に活動する桂かん、竹之内淳志ら。
  - 8 注4の論文に既出のBruce Barid 'Structureless in Structure : The Choreographic Tectonics of Hijikata Tatsumi's Buto' 2007 は三上『器としての身体』初出の土方「舞踏譜」の英訳を中心に論を展開し、p.105には「多くの舞踏家が三上の考え方に共鳴」と、三上論の舞踏家への影響を指摘。しかし、本論文中、「三上が土方舞踏公演に出演してないため、三上は他の土方の弟子の舞踏譜に頼らざるを得なかった」という表記は『器本』の誤読。三上在籍中の稽古も基本的には土方舞踏譜によって行われていた。
  - 9 湯浅泰雄『共時性の宇宙観—時間・生命・宇宙』人文書院 1990 pp.7-35
  - 10 三上賀代「土方巽・暗黒舞踏の受容と変容 (3) 身体・言語・イメージ—野口体操と三木形態学を手がかりに」『京都精華大学研究紀要』 2006 pp.147。「まとめ—内臓復興による胎児的世界の感得から私になる」において、舞踏の身体の可能性を、禪定の深まりとの類似およびユングの集合的無意識と重なる「億の日記帳」を蔵した身体として提起。
  - 11 三上賀代学位論文「土方巽研究—暗黒舞踏技法試論」中「第六章 消える構造 第二節 土方暗黒舞踏の受容と変容—舞踏家の眼を中心に」
  - 12 湯浅泰雄『身体論—東洋的心身論の試み』講談社学術文庫 1990 pp.273-276, p.369
  - 13 同注12 pp.273-276
  - 14 源了円『型』創文社 1989 p.148
  - 15 原田香織編著『狂言を継ぐ—山本東次郎家の教え』三省堂 2010 p.2

**主要引用参考文献**

石田秀実編『東アジアの身体技法』勉誠出版 2000

三上賀代『器としての身体—土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』ANZ堂 1993

「土方巽研究—暗黒舞踏技法試論」お茶の水女子大学学位論文 1997.3

源了円『型』創文社 1989

蓑内宗一『ツボと日本人—東洋動作学への道』いなほ書房 1983

湯浅泰雄『身体論—東洋的心身論と現代』講談社学術文庫 1990

（『身体—東洋的心身論の試み』創文社 1977 改訂）

『気・修行・身体』平河出版社 1986

『日本古代の精神世界—歴史心理学的研究の挑戦』名著刊行会 1990

『共時性の宇宙観—時間・生命・自然』人文書院 1995

湯浅泰雄他『岩波講座・哲学9 身体 感覚 精神』岩波書店 1986

C.G.ユング、松代洋一・渡辺学訳『自我と無意識』思索社 1984

島津彬郎・松田誠思編訳『オカルトの心理学—生と死の謎』サイマル出版会 1989